

Title	竹頭木屑錄
Sub Title	
Author	加藤, 繁(Kato, Shigeshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.4 (1922. 8) ,p.99(577)- 104(582)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220800-0099

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

竹頭木屑錄

宰相牡丹の見料を取る

牡丹の栽培觀賞は唐代より流行し、宋に至つて愈盛なりき。而して宋時牡丹の名所として鳴響きたるは洛陽なりき。されば宋の太平老人が袖中錦には

近世有古所不_レ及者三事。洛花建茶婦人脚とて建州の茶、婦人の纏足と共に、洛陽の牡丹が近世の誇りなることを述べ、王得臣が塵史卷四には

洛人凡花不_レ曰_レ花。獨牡丹曰_レ花。

と云ひ、洛陽にて花と言へば直に牡丹を意味することを傳へたり。さて洛陽牡丹の盛を詳述したるものをお陽修が洛陽牡丹記と爲す。其の中に左の一節あり。

魏家花者。千葉肉紅花。出於魏相仁溥家。始樵者於壽安山中見之。劉以賣_ニ魏氏。魏氏池館甚大。傳者云此花初出時。人有欲_レ閱者。人稅三十數錢。乃得登舟渡_レ池至_ニ花所。魏氏日收三十數緡。其後破亡。鬻_ニ其園。今普明寺後林池乃其地。

宰相の家にて、人毎に錢十數文を取りて牡丹の珍種を觀せ、庭園に遊ばしめたること、彼國にては尋常なるべけれど、我等には異様に聞こゆ。亦以て國俗の差異を見るべきか。

庭園と茶湯錢

唐宋の際、洛陽に名公鉅卿の園池多かりしほ著名の事にて、宋の李格非が洛陽名園記に依つても

其の一斑を窺ふべし。司馬溫公の獨樂園も亦洛陽に在りき。獨樂園に就きて元の陳世隆が北軒筆記に左の如く記せり。

司馬公置_ニ獨樂園。當_ニ春明之際。卉木繁秀。觀者咸以_レ錢與_ニ園丁呂直。謂_ニ之茶湯錢。積_ニ十千而納_ニ于公。鄧_レ之曰。吾豈少_レ此哉。就與_レ之。

直曰天地間只端明不_レ愛_レ錢邪。于_レ是盡_ニ其餘創_ニ一井亭。以便_ニ行客。只_ニ不_レ愛_レ錢。可_レ竝端明。亦可_ニ以醒_ニ端明。要非_ニ端明。不_レ能_ニ有_ニ此儀_ニ也。不_レ意君實秀才之外。復有_ニ此_ニ一人。顧ふに錢を取りて園池の觀賞を聽すは、當時一般の慣ひにて、必しも牡丹の珍種を藏するが如き特殊の場合に限らざりしなるべし。獨樂園にて觀者が茶湯錢を輸したるも、此の一般の風習に従ひたるならん。惟溫公が之を郤けて園丁に與へたるは、さすがに流俗と選を異にせりと謂ふべし。尙ほ園丁が茶湯錢を以て設けたりといふ井亭は義井の類か。

尙書院を假貰す

唐の白行簡が李娃傳は、常州の刺史榮陽公の子某生が長安の娼李娃に迷ひて資財を蕩盡し、零落して乞丐と爲り、後復李娃に救はれて身を立て家を興すことを述べたるものなるが、其の李娃が詭計を以て資財盡きたる某生をつっぱなすところは吾等に取りて特に面白き節あり。曰く

上略
歲餘資財僕馬蕩然邇來姥意漸怠。娃情彌篤。他日娃謂生日與郎相知一年尚無孕嗣常聞竹林神者報應如響將致薦爵求之可乎。生不_レ知其計大喜乃質_ニ衣于肆以備_ニ牢醴。與_レ娃同謁_レ祠而禱祝焉信宿而返策_レ驢而後至_ニ里北門娃謂生日曰此東轉小曲中某之姨宅也。將_ニ憩而覲_レ之可乎。生如_ニ其言前行不_レ踰百步果見_ニ一車門窺_ニ其際甚宏敞其青衣自_ニ車後止_レ之曰至矣生下適有一人出訪曰誰曰李娃也入告俄有一嫗_ニ至年可四十餘與_レ生相迎曰吾甥來否娃下_レ車嫗迎訪_レ之曰何久疎絕相視而笑娃引_レ生而拜_レ之既見遂偕入_ニ西載門偏院中_ニ有_ニ山亭竹樹葱蒨池榭幽絕生謂_レ娃曰此姨之私第耶笑

而不答。以他語對。俄獻茶果甚珍奇。食頃

知所措。云云。

有二人控大宛。汗流馳至。曰姥遇暴疾。頗甚。殆不識人。宜速歸。娃謂姨曰。方寸亂矣。某騎而前去。當令返乘。便與郎偕來。生擬隨之。其姨與侍兒偶語。以手揮之。令生止于戶外。曰姥且沒矣。當與某謀喪事。以濟其急。奈何遽相隨而去。乃止。共計其凶儀。齋祭之用。日晚乘不至。姨言曰無復命何也。郎驟往覘之。某當繼至。往至舊宅門。扃鑰甚密。以泥緘之。生大駭。詰其隣人。隣人曰李本稅此而居。約已周焉。第主自收。姥徒居而且再宿矣。徵徒何處。曰不詳其所。生將馳赴宣陽。以詰其姨。日已晚矣。計程不能達。乃弛其裝服。質饌而食。賃榻而寢。生恚怒方甚。自昏達旦。目不交睫。質明乃策蹇而走。既至。連扣其扉。食頃無人應。生大呼數四。有宦者徐出。生遽訪之。曰。姨氏在乎。曰無之。生曰。昨暮在此。何故匿之。訪其誰氏之弟。曰。此崔尚書宅。昨者有一人。稅此院。云遲中表之遠至者。未暮去矣。生惶惑發狂。罔

院とは、宅の一部にして、垣を周らし、一區劃を爲せるものを謂ふ。稅は賃借の義なり。李娃は崔尚書の院を一日の期限にて借受け、姨の第と見せ置きつゝ、母の急病に託して己先づ去り、巧に生を振棄て了はりしなり。此れに由りて、唐代尚書の大官に在るもの、其の第宅の一部を、一日いくらと料金を定めて、見ず知らずの他人に貸附くることありしを知るべし。是亦我國にては絶えて無き所なるべし。

御苑の開放

宋時毎年三月、順天門外（汴京宮城の順天門にして長安の順天門に非ず）なる金明池にて水戯を行はしめ、車駕親臨して之を閲するを機會として、金明池並に之に隣れる瓊林苑を開放して廣く士民の遊賞を聽せり。是れ續資治通鑑長編卷四十八咸平四年三月癸酉、樞密院の上奏に

準例。春季金明池習水戯。開瓊林苑。縱都

之。第曰。此崔尚書宅。昨者有一人。稅此院。云遲中表之遠至者。未暮去矣。生惶惑發狂。罔

とあり、同_{十七}大中祥符五年三月甲午の詔に

と傳へらるゝものなり。

金明池瓊林苑。先許_{士庶}行樂。或小有_{紛競}。

不_レ至_ニ殿傷_者。官司勿_レ得_ニ擒捕_一。

とあるに依り、又東京夢華錄卷七三月一日開金明池瓊林苑の條などに依りて知るべし。

元曲金錢記第一折、王府尹の白にも

今奉_ニ聖人的命。明日三月初三。但是在_ニ京城

裏外官員市戸軍民百姓人家。或妻或妾或女。都

要_下赴_ニ九龍池_{一賞_中}楊家一捻紅_上那九龍池週圍。

擣_ニ紅繩_爲界。裏是文武官員家妻女孩兒。紅繩外是軍民百姓家妻女孩兒。云云。

とあり。金錢記は唐の事として書かれ居れど、實は元代の世相を描けるものに外ならざるべく、隨つて御苑の開放は元代にも行はれたりと見て可ならん。文武官員市戸軍民百姓人及其の妻妾女孩兒、

即ち上下一切の階級男女を舉つて九龍池に赴き、楊家一捻紅を賞せしむといふは面白からずや、揚

家一捻紅は牡丹の名花なり。明皇の時此の花を獻するものあり、楊貴妃之を捻して指痕を印したるに、明年花開くに及びて尙ほ一點の紅を留めたり

者往焉。與民同之。とあるは一片の空想と思ひさや、其の精神が微ながらも後世の政治に現れ居ること、右にて知るべし。

街鼓

唐の都長安にては、日暮るゝや、鼓を擊ちて坊市の諸門を閉ぢ、人の通行を禁じ、曉に至り、復_鼓を擊ちて人の通行を聽せり。暮夜の鼓を閉門鼓と云ひ、曉の鼓を開門鼓と云ひ、閉門鼓の後、街路を行くものは之を犯夜と謂ひて笞二十に處せり。蓋賊盜を防がんが爲なり。唐律疏議卷十六犯夜の疏議に

宮衛令。五更三籌。順天門擊_レ鼓。聽_ニ人行。晝漏盡。順天門擊_レ鼓四百槌。訖閉_レ門。後更擊六百槌。坊門皆閉。禁_ニ人行。違者笞二十。云云。

とあり。順天門は宮城の南門にして、中宗の神龍元年改めて承天門と云へり。鼓は此門にて擊鳴らしたりを見ゆ。而して初に擊つこと四百槌にして

先づ順天門を閉鎖し、次に復擊つこと四百槌にし
て城内百餘坊の坊門を悉閉ち了りしなり。李娃傳、
某生が始めて李娃を訪ふ條には、

久レ之日暮。鼓聲四動。姥訪其居遠近。生給レ之。
曰。在延平門外數里。冀其遠而見留也。姥曰。
鼓已發。當速歸。無犯禁。

とあり。茲に鼓といふは閉門鼓なること論を須た
ず。閉門鼓は之を擊つこと前後一千槌にして坊門
を閉づるが故に、鼓擊既に動くの後といへども、

急ぎ行かば、李娃が住める平康坊より延平門（長安
城西面の大門にして之を出づれば城外なり）に達
するを得しならん。さればこそ李娃が母は生に速

に歸らんとを勧めたるなれ。但し右の文には鼓聲
四動とあり。順天門にて擊鳴らすを四動といふは
稍受取り難し。按するに舊唐書馬周傳（馬周は太宗
時代の人）に曰く

先レ是京城諸坊。每レ至晨暮。遣人傳呼以警

衆。周遂奏。諸街置鼓。每擊警衆。令罷傳
呼。時人便之。

蓋順天門にて鼓を擊つも城内限無く徹底すべきに

あらざれば、初には人を諸街に遣はして傳呼せし
めたるを、太宗の時馬周の議に依りて諸街にも鼓
を置きて之を擊つこと爲ししなり。是より後鼓
聲一たび順天門に動くや、諸街の鼓爭うて之に應
じ、鼃鼃の響城内に満ちたるならん。李娃傳に鼓
聲四動とあるは正しく之を謂ふなるべし。

開門鼓閉門鼓は街鼓若しくは鼃鼃鼓とも呼ばれ
たるが、之を街鼓といふは諸街にて擊鳴らすが
爲に外ならず。

百官曉に入朝す

唐時、宰相以下百官は、開門鼓前、燭を秉りて入
朝したり。蓋此時坊門未開かざるも、百官には特
に通行を聽せしなり。憲宗の元和十年六月三日、
成德節度使王承業の刺客が宰相武元衡を殺したる
は、當時朝野を震駭せしめし大事件なるが、舊唐

書武元衡傳には

元衡宅在靜安里。十年六月三日。將朝。出里。
東門。有暗中叱使滅燭者。導騎訶之。賊射
之中肩。又有匿樹陰突出者。以棓擊元衡

左股。其徒馭已爲賊所格奔逸。賊乃持元衡馬。東南行十餘步害之。批其顱骨。懷去。及衆呼偕至。持火照之。元衡已踣於血中。卽元衡宅東北隅牆之外。時夜漏未盡。陌上多朝騎。多云云。

とあり。刺客等は闇に紛れて靖安坊の東門外に待伏せし、元衡が門を出づるを俟ちて掩撃せしなり。此れを見ても宰相以下が曉を冒して入朝せしこと明なり。

唐の天子は初宮城に在りしが、高宗の龍朔以後大明宮に移れり。隨つて百官も、龍朔以後は、日

々大明宮に入朝せり。大明宮の正南門を丹鳳門と云ひ、其の東なるを望仙門、西なるを建福門と云ひ、百官は望仙建福二門より出入したり。而して此の二門は諸坊門と同じく五更を以て開くの制なりしが、肅宗の時吐蕃の俘虜逃亡して城中を騒がせしことありし後は、其の開門稍晚くなれり。されど百官は猶五更の頃に參着して其の開門を俟つこと舊の如くなりしかば、元和二年建福門外に待漏院を設けて休息の處に充てたり。此等の事は舊唐書憲宗紀、南部新書等に見ゆ。

街波及待漏院の制は宋代にも引き行はれき。